

---

## 坊主にした理由

ふく

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

坊主にした理由

### 【Zコード】

N7317D

### 【作者名】

ふく

### 【あらすじ】

真冬に、坊主にした私が友人である彼の家に遊びに行くことになつた。そこで起きた、戯れ言のような話。

「おお、思いきつたな  
私の頭を見ていわれた。

「目線が頭に集中してるよ」照れと苛立ちから言つてやつた。

「……うるせえな。坊主にして、仕事に影響ないのか？それに、何で坊主にしたんだ？」

なぜか眉をひそめ、そして、鋭い目つきだ。

「仕事の方は、大丈夫だった。小言をいわれるのを予想していたんだけどね。……昔より緩くなつたのかな？」

「と、いうより、髪型として認知されてきたってことじやないか？それにお前、営業じやないだろ。ま、とりあえず行こうぜ」と、

いつて歩き出したので、私もついて行く。

「うん。それは感じる。古株の人はどう思つているのか解らないけど、若い人の反応はお前と似たようなものだったよ。さすがに頭、撫でてはこなかつたけどね」

「そりゃそうだろ。あ、そうだ。ちょっとコンビニに寄りつけ。寒いしな。……んで、何で坊主？」

「ああ。おもしろいからだよ。それにおもしろくなるよつて、だ。ま、坊主じゃなくともよかつたんだけどね」

「なるほどね、お前らしい」と、いつて彼は笑つた。解つてくれたようだ。さて、目的地は彼の家なのだが、その前にちょっと寄り道だ。

彼の家に行くのは久しぶりだ。彼が結婚をしてからは行つていないので、五、六年ぶりになる。道を忘れてしまつたため、駅で待ち合わせをした。道は、駅から三方向に伸びており、右が西で、左が東。私たちは南へ向かった。ちょうど『』の形だ。

彼の提案をうけ、コンビニへと向かっている。駅から南への道は、

商店街になつてゐるのだが、あまり活氣がない。いくつかの十字路を通つた。『+』の形だ。そして、T字路になつたため、右へ向かう。『T』の形。私はこのようにして道を覚えるのだ。人にいわせると変な覚え方らしく、また、そんな人はいないともいわれたことがある。だが、あまり気にしていない。ただ、この覚えかたには弱点がある。工具などがあると、道が解らなくなるのだ。とても困るのだが、今はGPS機能付きの携帯があるので問題ない。

今は、西へ向かつてゐる。この道は左へ緩やかにカーブしていて先が解らないのだが、途中、右手側にセブンイレブンの看板が見えてるのでそこへ向かう。寄り道だ。私は店の方へ向かつたのだが、なぜか彼は店へ向かわず通り過ぎた。『Y』のような流れだ。

「寄らないの？」後ろから声をかけてあげた。

「ああ」と、頭をかきながら振り向き、

「この先のローソンに行く」といつて、前を向き歩き出した。百メートル先くらいに小さく看板が見えた。

寒いので、あつたかい缶コーヒーと中華まんを買った。彼も店を出てきた。ちょっと行儀が悪いが、彼の家へ歩きながら食べる。歩きながら食べるとおいしく感じるのはなぜだろう。そういうば、もう一つなぞがあるので、そろそろ聞いてみる。

「なあ。なんでローソン？」彼は、またしても頭をかきながら、「いや。まあ、なんだ。その、実はな……」と、はぎれが悪い。

「奥様が、な。パンの袋に付いてるシールを集めててな。シールを貯めて送りつけると、皿が貰えるとか。俺は皿なんか欲しくないんだが、協力させられて、だな……」

けなげである。袋を見ると、色々な種類のパンを買ったようだ。彼の飲んでいるお茶にもシールが付いているが、関係はないだろう。協力をしないと彼の奥様に、機嫌が悪くなる、冷たくなる、会話

が続かなくなる、などの症状が現れるらしい。

「見てないから解らないけど、勘違いじゃない?」

「いや。そんなことはない」断言された。

寄り道もすみ、彼の話ではコンビニから近いらしい、こよいよ本命に近づいてきた。そういえば、見たことあるような景色だが、どこも似たようなものだらう。道なりに三百メートルくらい歩いたかな。

「いいだ。」

見ると外装は白だが、月日がたつているためかくすんでいる。戸数がどれだけあるのか、まだ解らないが気にしない。

「あ。マンションの左隣、空き地になつてているだろ。」

と、指でさした方向をみると、『空き地』と書かれた看板がたつてている。その敷地には建物は建っていない。

「ああ。それが?」

「そこは、薬局だったんだけど、三ヶ月くらい前につぶれてな。」  
と、いつてマンションへ入つていぐ。オートロックを鍵で開け、通路を奥へと進んでいく。

「それで?」

エレベーター前で止まつた。『上』のボタンを彼は押した。

「いや、まあ、ここに引っ越してきた時には、薬局は建つていたんだが、それがなくなつた訳だ。で、さつき空き地を見たら……お前の頭みたいだなー、って思った。それだけ」と、奴はニヤニヤ顔でいつた。

エレベーターが到着。奴は乗り込んだ。

「……」

「……」

「……」

「乗ってくれよ

けなげである。

六階で降りた。部屋は六〇二号室らしい。私は、年賀状などというものは送らないので住所を覚えていない。メールでよい。  
部屋の前に着くと、カレーの香りがした。彼の住まいからかどうか解らないが、確率は高い。彼はチャイムを押した。数秒後、ドアが開いた。

「はーい。あつ、おかえり。あら? 『こんにちは』

彼の奥様だろう。主觀だが綺麗な方だ。それにしても、私がお邪魔することを彼女に話していなかつたようだ。

「こんにちは」と、彼女に挨拶を返した。

「ま、入ってくれよ。あ、パン買つてきたぜ」なぜか、皿邊げだ。

玄関からリビングへ案内された。一言でいつなら、おもしろい部屋、だわう。整理整頓されているのだが、何しろ物が多い。CDやDVD、小説、おもちゃ各種が並べられている。普通の人気が持つている量の二、四倍ぐらいはあると思つ。ここで言う普通とは、一般的にとしておこつ。それにしても、やはりおもしろい。

彼の奥様とは、結婚式いろいろあつていなかつたので、血口紹介をした。彼女も自己紹介をしてくれた。名前は『まこ』といふ。漢字が解らない、ところと『真子』と教えてくれた。その間、奴はニヤニヤ顔をしていたが、あまり気にならなかつた。

じゃあ、といって、真子さんはキッチンの方へ向かつていった。残つた私と彼で、主に情報交換をした。映画や音楽、小説の話だ。とても楽しい。

「夕飯はどうします? 食べていきます?」と、真子さんが聞いてきた。どうやら、結構、時間がたつていたみたいだ。時計を見ると三時間くらいたつていた。楽しい時は時間が早く過ぎるような気がする。

「あれ? もうそんな時間が。そうだな、食べていけよ」と、彼も

誘つてくれたので、食べさせてもらひつ」とした。

「そうする。因みに、メニューはカレーですか？」

「あれ？ やつぱり解りました？」

「ええ。カレーは大好物なんですよ」

「じゃあ、がんばらないと。さつそく、支度してきますね」

ホホホホホという感じで、彼女はキッチンへ向かった。なかなかチャーミングであるが、今からがんばっても料理は変わらない気がした。料理以外のことにがんばる、ということかもしれない。

リビングのテーブルの上には、サラダやほうれん草のおひたし、福神漬けなどがならんだ。和風の皿が使われていてよい感じだ。そこへ、真子さんが、カレーを運んできた。よい香りがして、見た目もよくおいしそうだ。

「お口にあうかどうか……」

「いえいえ。そんな偉そうな口じゃないですよ」といつて食べる。おいしい。

「おいしいです」

「ありがとうございます。」笑顔になつた。彼女も食べ始めた。と、ニヤ<sup>ニヤ</sup>気ているであろう奴を見てみると、カレーに夢中だ。奴もカレー好きなんだ。

真子さんがテレビを付けた。丁度、ニュースの時間だ。私はテレビを見なくなつたので久しぶりに見る。おもしろくないのとそんな時間がなくなつた為だ。ニュースは相変わらずだ。これなら見なくとも、ネットでよいと感じた。

ニュースの趣旨が変わり、今日の出来事などといふものに変わった。『今日、一月四日は、立春です』と、ニュースキャスターがいつた。どうでもよい。

「ほー。立春か」しかし、奴は反応した。

「立春つことは、暦の上では立夏の前日までが、春といふことだ」

私も奴もカレーを食べ終わった。まつたりとする時間だ。

「だから何？ 知識自慢？」

「違う。春つてことは、これから暖かくなり、花が咲くいい季節だ。違つか？」彼は、何がいいたのだろうか？ただ、嫌な予感がするので軽く流し、話題を変えようと思ひ。

「まあ、そうだね。それよりも違う番組みよ……」

「よかつたな。これから、お前の頭にも春がくるぞ」いい終わらなり内に、かぶせてきた。

「……無関係。相変わらず、くだらないね。……ただ一言いわせてもらえば、これで三回目だぞ。いい加減にしてくれ」

「お前は、仏か？」どうやら、奴は喧嘩を売ってきているらしい。「ちょっと。あなた三回もこんな失礼なこといったの？」カレーを食べ終えた真子さんが、突っ込んできた。

「え？ あ、いや。お前余計なこといつなよ」なぜか私に文句を付けてきた。文句をいいたいのは私のほうである。

「どうなの？」

「どうつて……まあ、いいじゃない」奴は少し、押され気味だ。

「（）まかさない。よくはない」ふむ。真子さんに任せることにする。

「……うるさいな」

「そう。それは、失礼。でも、あなたが悪いのよ」

これは、よいシステムを発見したようだ。真子さんがいると奴は大人しくなるみたいだ。覚えておこう。しかし、真子さん。少し怒りすぎなのではないだろうか？

「おい。何がおかしいんだよ」どうやら顔に出ていたらしい。彼を見ると、バツの悪そうな顔をしている。気の毒に。

楽しい日だ。これからも楽しくなるよう努力をすべきだ。これは、蓋を開けてみて、やはりそうだ、と思える。……ふと。テレビ番組は、バラエティーに変わっていた。仕事とは解っているが、うるさい、と感じる。だから気になつたのかも知れない。それにしてもだ。

そこまでおもしろくはない、方向を間違えてこると思える。……いや。そこまで言い切れないか。もしかすると、少しこの答えは無く、グレーなのかも知れない。もう少し考えてみよう。  
「おー、何『我、関せず』みたいなおとぼけ顔してんだよ」「えっ？ あ、いや。そんなことないよ」  
「そうですよ！ ひどいことをいわれたんですよ？ もつと怒ったほうがいいんじゃないですか？」

えっ？ なぜ、私が怒られる？ それに真子ちゃん、怒りますが。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7317d/>

---

坊主にした理由

2010年10月8日15時55分発行